

令和3年度 学校経営計画・自己評価書

足立区立洲江中学校

校長 伊東 一

1 学校教育目標

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 よく考え自ら学ぶ生徒 | 2 正しく判断し実行する人 |
| 3 礼儀正しく情操豊かな人 | 4 心身ともに健康な人 |

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	○ 生徒と教職員が共に誇りをもち、保護者・地域から信頼され、夢と希望を育む学校 ・「夢を実現できる生徒」を育む学校 ・「健康で自律心や規範意識を身につけた人間性豊かな生徒」を育てる学校
○児童・生徒像	○ 総合的な人間力のある魅力ある生徒 ・自ら学ぶ生徒 ・思いやりの心をもち、社会に貢献できる生徒 ・豊かな情操と体力を育み、心身ともに健康な生徒
○教師像	○教育のプロとしての自覚があり、誇りと情熱をもつ教職員 ・実践力、指導力のある教職員 ・信頼され教職員 ・情熱のある教職員

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

<学校の現状>

落ち着いた学校生活を送っている。新型コロナウイルスの感染防止対策に注力しつつ、500名を超える生徒と全教職員が一体となって取り組む行事の良さを維持すべく工夫・努力している。落ち着いた雰囲気です授業が行われ、知・徳・体の調和のとれた生徒の育成に向けて邁進している。

<前年度の成果と課題>

成果： 新型コロナウイルス感染拡大が続く中、学力向上の取組や多くの学校行事が制約を受けることになった。思うような教育活動ができないことへの苛立ちもあったが、教職員の団結と献身的な努力、生徒の頑張りによってマイナス面を最小限度にとどめることができたと考える。特に学習面で多くの指標が上昇傾向にあり学力向上の道筋が見えてきたこと、Zoom等のICT機器の活用が飛躍的に広がったこと、文化祭の代替行事として行った「ビデオ・展示鑑賞会」が様々な工夫により生徒に大きな達成感をもたらすことができたこと等が成果である。

課題： 今年度は新学習指導要領全面実施の年となる。昨年度はその準備最終年度であり、その研究・準備に努めた。今後も形成的評価による計画の見直し等を含め、よりよい教育活動実施に向けて取り組んでいく必要がある。また、新型コロナウイルスの感染状況が見通せない中、少しでも本校の特色ある教育活動が実現するように工夫・努力を重ねていくことも大きな課題である。

4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） H:平成 R:令和				
		H30	R1	R2	R3	R4
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	秩序と活力のある学校生活の構築	○	○	○	○	○
3	小中連携活動の充実と教員の授業力向上	○	○	○	○	○

5 令和2年度の重点目標

重点的な取組事項－ 1		学力向上アクションプラン							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標正答率・通過率)		実施結果 (正答率・通過率結果)		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
「授業が楽しい」「授業がわかりやすい」という生徒の増加 令和4年度区学力調査の結果、学力での自己肯定感を高める。		授業が楽しい、わかりやすいという生徒の割合	80%	授業が楽しい、わかりやすいという生徒の割合	87.6%	・生徒アンケートにより「授業が楽しい、わかりやすい」というの割合は高いが、年度末到達度の正答率に結び付かない。家庭学習内容の充実と定着度を高める取組が課題である		○	
年度末到達度調査正答率		60%		年度末到達度調査正答率	54.8%				
令和4年度区学力調査通過率		60%							
B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクションプラン	対象教科 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (＝数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 継続	授業改善・授業力向上	全教科担当	年間	・全教員が年2回、指導案を全教員に配布して公開授業を行う。 ・授業後に管理職等と共に授業改善に向けた協議の場を設ける。 ・小中連携活動の中で共通の指導案での授業公開・研究授業を行う。 ・週案にコメントを書き、教員の授業改善への意欲を高める。	・生徒の授業アンケート年間3回	・6項目のアンケートすべてについて、肯定的回答の上昇(80%以上)	・6項目の平均肯定率は86.8%で目標は達成できた。	・予定通り授業公開は行い、指導・助言を行い授業力の向上は徐々に図れている。他のアクションプランとの関連性を図り、正答率及び通過率の向上に結び付けることが課題である。	○
2 継続	放課後補充	全学年 全生徒 英語・数学	毎日 ※行事 組期間 等を除く	【指導体制】学年担当教員 【取組内容、ねらい・目的】教材等を使い、生徒に学習内容の定着を図る。各教科で確認テストを実施する。確認テストの結果によって個別指導を行う 【使用教材】教材(英、数)	・各教科で進捗等を考慮して確認テストを実施	・確認テストで目標点を超えない生徒に家庭学習課題を与える ・上記学習課題提出率100%	・家庭課題学習の提出率は ・昨年度に引き続き全員補習を実施した。落ち着いた取り組みのある補充時間となった。	・コロナ禍のため思うように放課後補充を実施することができなかった。確認テストが不十分であり、拔出指導を依頼しながら充実させるかが課題である。	△

3 新規	I C T 機器の活用	全学年 全生徒 5教科中心	年間	・ 5教科を中心に、 ①教員が I C T 機器を活用して授業を行う。 ②生徒の I C T 機器使用場面を広げる	①生徒の授業アンケート ②自己申告面接	① 肯定的回答 80%以上 ② 生徒に使用させる教員の割合上昇	① 82.5% ② コロナ禍で使用頻度は高まっている。	ほぼ全教科で大型スクリーンを活用する授業が展開できている。生徒の使用頻度を高めることが課題である。	○
4 継続	サマースクール（基礎コース）	全学年 国語・数学・英語 目標値未 満 各学年約 30名程度を募集	夏休み 期間中の7日 各日 50分	【指導体制】 教科担任1名＋学年サポートメンバー1名 【取組内容、ねらい・目的】 当該年度の前半期の内容でつまずきおよび学力調査の目標正答率が高い問題で、本校の生徒の達成率が低い問題の未定着を解消する。T1が問題の説明を行い、T2が机間指導をすることで解消を図る。 【使用教材】プリント教材	サマースクール終了後、確認テストおよび定期テストで確認	夏休み終了後の確認テストで全員の正答率を20%の上昇できなかった場合、冬休みの宿題でもう一度勉強し直す。	・ 昨年同様、コロナ禍により、夏季休業中に予定していたサマースクールが実施できなかった。	・ 昨年度及び今年度できなかったことを来年度実施する必要がある。 ・ 自校実施の予定であった勉強合宿ができなかった。来年度はどのような形での実施になるかわからないが自校実施の可能性も含め校内体制を整えることが課題である。	●
5 継続	家庭学習の習慣化	全学年 全員 英・数	各教科 週1回 3か月間	【取組内容、ねらい・目的】 毎日2ページの家庭学習ノートを提出。 ・ 授業の振り返りを基に学習方法を提示する ・ 週2回分の学習内容を区 学力調査の正答率の低い問題が定着するような内容に限定する。	宿題提出状況調査	全学年宿題提出率を80%にする	1年 93.0% 2年 80.5% 3年 95.0%	・ 平均提出率は達成したが、振り返りを基にした学習内容が提示できず、個々の判断での学習内容である。日々の授業を反映した家庭学習への指導の徹底を図る必要がある。	△
6 継続	1年間の総復習	1, 2年 全員 5教科	2月 ～4月	【取組内容・ねらい・目的】 ・ 復習確認テスト等を行い、学習内容の定着度を確認し、定着度の低い問題を授業で解説し、春休みの宿題で確認 ・ 必要があれば春休みに個別指導を行う。	宿題提出状況調査	全員の宿題提出率を100%	・ 春休みに宿題を出し提出させる。 ・ 100%提出させるように働きかける。	・ 各教員の分析力が弱い。定着度の低い問題に対する指導力の向上が課題である。春休みの個別指導に期待する。	△

重点的な取組事項－2

秩序と活力のある学校生活の構築

A 今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
------------	------	------	---------	-----

成就感・達成感のある学校生活を堅持し、学校評価における肯定的評価 90%以上を維持する。	「学校が楽しい」と回答する生徒の割合 90%以上	・学校が楽しいという生徒は、95.6 (92.3) %であった。(昨年度)	コロナ禍でもできること範囲で各行事を実施することができた。	◎	
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
達成感のある行事の推進	90%以上の生徒が各行事での達成感を得る。	全校生徒から自己肯定感を高めることができるよう一人一役で役割を与える。	コロナ禍でも工夫を凝らしほぼ予定通りの行事を実施できた。	生徒の満足度は 100% 近く、成就感・達成感につながっている。	◎
人権に配慮した個別指導	いじめ質問紙調査(年3回)、個別面談(年3回)を実施する。	・得た情報をもとに、即時組織対応する。	・いじめに関しては即時対応することができた。個別面談も予定通り実施できた。	・人権にかかわる事案に関しては厳しい姿勢で臨むことができた。	◎
不登校生徒への対応	不登校出現率 6 % 以内にする。	・教育相談部会で個に応じた対応を検討し指導に生かし組織的に対応する。	不登校出現率は 5. 6 % と目標は達成できた。	昨年度に比べ減少はしたが、コロナ禍での出現もあり、継続した指導が必要である。	○

重点的な取組事項－3		小中連携活動の充実と教員の授業力向上			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
小中教員の合同研修会や研究授業により、授業規律・新学習指導要領にそった授業等を含む教育活動委ついて理解を深め、授業力・生徒指導力の向上につなげる。		年間6回、全教員が参加して小中連携活動を実施 小中1回ずつ指導案検討・研究授業・研究協議を実施	授業研究や合同研修は予定通りの回数はできた。しかし、児童・生徒間の交流ができなかった。	児童・生徒間の交流ができなかったため、成果を判断することが難しかった。	△
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
合同研修会と研究授業	年間計画により合同研修会を2回、指導案検討・研究授業を4回実施	・小中の管理職と小中連携担当者により連絡・調整を前年度に行い年間計画により実施 ・講師を招いての教科指導法や新学習指導要領等の研修も実施	・コロナ禍で思うように実施できなかったが、ビデオ撮影による授業研究等工夫を凝らし、何とか予定の回数は実施することができた。 ・講師を招いての研修もできた。	・工夫を凝らしながら、授業研究を進めることができたことは成果である。この成果を次年度に活かすことが課題である。	○
指導案の共通化	研究授業に際し、連携の視点等の共通項目を設定する	・共通項目について、前年度中に検討し、今年度より指導案に設定する ・すべての研究授業で上記の共通項目を入れた指導案を作成・配布する	・分科会で共通理解を図ることはできたが、指導案を共通化することができなかった。	・長・副共に変わり、できなかった前年度の計画ということで十分な意思疎通を図ることができなかった。	●

6 まとめ

1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

ア 学力アクションプランについて

【課題】・1、2年到達度調査正答率（2月5日（土）実施予定）

＜国語＞1・2年共に60%を超えた。現在の取組をさらに効果的にすべく工夫・実践していく。

＜数学＞1・2年共に50%を切ってしまった。（1年49%、2年48.5%）1年基礎が定着していない。文字を用いての処理が苦手な生徒が多い。2年では関数や資料の活用が弱い。数と式の確実性を上げることが求められる。

＜英語＞1年52.5%、2年48.9%であった。共に前年度を下回っている。両学年とも語彙力が原因で長文読解に課題がある。

【対策】＜1年数学＞同じ内容を何度も取り扱い、文字に触れる機会を増やす。生徒に問題を作成させたり、自分で表現する機会を多くする

＜2年数学＞関数や資料の活用に対し意欲的に取り組ませる雰囲気をつくる、春休みに関数、資料の活用についての基礎問題を構成する。

＜1年英語＞語彙力を高める指導を取り入れ、ドリルを徹底する。

＜2年英語＞文法の問題に取り組ませ、まとまった内容の英作文に取り組ませる。新年度は多読、速読の教材を導入する。

イ その他

【今年度の成果】・昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染拡大が続く中、補充教室、サマースクールなど学力向上の取組や多くの学校行事が制約を受けることになった。しかし、教職員の団結と献身的な努力、生徒の頑張りによって「コロナ禍でも今できることを最大限に」を目標に教育活動を展開できたと考えている。学校生活満足度が全学年90%以上を超え、生徒の自尊感情や自己肯定感を高めることができたことは成果である。それが学習面にも及び多くの指標が上昇傾向にあり学力向上の道筋が見えてきた。不登校生徒の対応も含め、Google Meet、クラスルーム等のICT機器の活用が飛躍的に広がったこと等が成果である。

【次年度に向けた課題及び解決の方向性】・今年度は新学習指導要領全面実施の年となり、評価等の課題も見えてきている。各教科においては指導と評価の一体化を高め、形成的評価による計画の見直しを今後とも継続する必要がある。また、大きな課題として、新型コロナウイルスの感染状況が見通せない中、本校の特色ある教育活動が地域、近隣小学校の児童とその保護者に発信できないことである。特に小中連携においては本校の魅力を伝えることができずに今年度は入学希望児童が大幅に減ってしまったことは残念である。学区児童70%以上の目標を掲げ、全教職員で本校の特色ある教育活動を展開し、発信、周知できるように工夫・努力することである。

(2) 保護者や地域へのメッセージ

日頃より本校教育活動に深いご理解と、ご協力、ご支援をいただき有り難うございます。「出会い」「ふれ合い」「学び合い」「競い合い」「響き合い」を掲げ、「よく考え自ら学ぶ生徒」「正しく判断し実行する人」「礼儀正しく情操豊かな人」「心身ともに健康な人」を目指しながら各教育活動に取り組んでまいりました。今年もまた新型コロナウイルス感染症に悩まされながらの学校生活でしたが、生徒たちは上級生を良き見本として「何事にも全力で取り組む」ことを合言葉に元気に意欲を持って学校生活を送ってくれました。学習活動ではコロナ禍で整備の進んだICTを活用し、できる限りでの「協働的な学び合い」を含め、生徒の主体的な学習姿勢を大切にした授業を展開してまいりました。生徒の学校生活アンケートでは「学校が楽しい」「授業が楽しい」いずれも肯定的意見90%以上を超えることができました。今年は男子バレーボール部が全国大会優勝、女子バレーボール、卓球部、サッカー部が都大会出場と昨年涙をのんだ分を遺憾なく発揮してくれました。ボランティア等外に出て活躍する場はありませんでしたが、着実に生徒一人一人の自己肯定感や自尊感情も伸びてきています。今後の生徒の活躍に期待していただきたいと思います。

その上で、今後も以下の3点を大切にしながら学校運営を進めてまいります。1つは「生徒のために」という教育活動に対する教職員の意欲がある学校、2つ目は日常的に保つ保護者や地域との良好な関係にある学校、3つ目は学校や友達が好きな子どもが大勢いる学校です。これを病気に負けない免疫力のある学校の基礎体力と考え、今後どのような困難や課題があろうとも乗り越えられる基礎体力のある学校づくりを目指していきます。保護者や地域の方々も是非この基礎体力のある学校づくりにご理解をいただき、ご協力、ご支援をお願いいたします。

(3) その他（学校教育活動全般について）

「瀏江中らしさ」とは生徒と教員が一体となり、何事にも全力で取り組み、多くの感動体験を積み重ねることで自己有用感や自尊感情を育てるところにある。これは決して教員の押しつけではなく、生徒自らが主体的に考え、行動することで学校生活の向上を図っているのである。生徒に「自分や自分の周りにいる人を幸せにすることができる力」を身につけさせるためにも、まず教職員が一体となって主体的な姿勢を見せる必要がある。この基本的な考え方が本校の教育活動の原点である。そして、そのような教育活動が長年にわたり大きな成果を上げ、生徒・保護者・地域の強い支持を得て継続していることが本校の伝統である。今、コロナ禍にあり、なかなか見通しがきかない中で本校の伝統を維持・発展させ、ポストコロナ、ウィズコロナ見据えた新しい時代の要請に応えるべく、さらなるチャレンジを続けなければならない。学習指導要領全面実施二年目を迎え、「個別最適な学び」「協働的な学び」をキーワードとして「主体的・対話的で深い学び」につなげるよう今後も多方面の意見を頂戴しながら精進していく所存である。

